

八千代に伝わる夫婦愛の物語

おしどり寺伝説



時は保元、平安
京後白河上皇の時
代、平清盛が嚴島
神社を修復した頃
のお話です。

ここ、村上辺田
前の下は阿蘇沼と
いう沼地でした。

この地に平真円

という男が住んでいました。

真円は常々、殺生を好む男でしたが
この日も阿蘇沼のほとりで狩りをして
いました。

折りしも、つがいのおしどりが葦原
を泳いでいるのを見つけ、羽色鮮やか
な一羽を射殺し、家に持ち帰りました。

その夜、一人の美しい女が真円を訪
ねてまいりました。そして、悲しそうに
「今日、吾が夫を殺し給ふ」と言います。

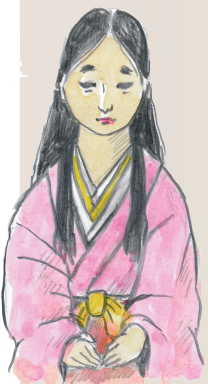
真円は、そのような覚えは無いと答え
ますが、その美しい女は

日くれば誘ひしものを阿蘇沼の

まこもかくれの一人寝ぞうき

と詠じて姿を消します。

真円はその後を追おうとしますが、
それは、おしどりの雌の後姿でした。



「八千代の歴史と文化」
のこしたいもの
つたえたいもの

①

監修 小林 弘治
絵 小出 忠美



翌朝、真円が納屋
のおしどりの様子を
見に行くと、射殺し
た雄のおしどりに寄
り添うようにして死んで
いる雌のおしどりのおし
どりを見つけました。

真円はこの姿に心を打たれました。
野の鳥までが、このように情愛が深
いものを、自分人間世界に生を受け
ながら、何と罪深いものであったので
あろうと…。

真円はこの世の生死無常を思い、出
家を決心し、仏門に入ったのです。

阿蘇沼のほとりに草庵を結び、池澄
山鴨鴛寺と名付けたのであります。

いつの頃からか、この沼のあたりに
は片葉の葦が生えるようになり、おし
どりの情の深さに、葦さえも心を打た
れ、片方の葉を落としたのだと言われ
るようになりました。

池澄山鴨鴛寺正覚院縁起 伝聞



▲鴨鴛塚



平成の
文の倉建つ
阿蘇沼の
片葉の葦に
伝え聞く
いとおし鳥の
無常かな